医療の質向上に向けた改善活動の集大成
平成23年度さっぽろ香雪病院QC事例発表会

「平成23年度QC活動事例発表会」が11月24日、院内にて開催されました。各部署で結成された11サークルが参加し、より効率的、効果的で質の高い医療サービスの提供を目指して取り組んだ改善活動の成果を発表しました。

病院を挙げて取り組む

QC活動は製造業での品質管理手法として始まりましたが、最近はサービス業に取り入れる企業や病院も増えてきています。当院のQC活動は平成18年度にスタート。部署ごとに毎年テーマを決めて、業務の改善に取り組み、QC活動委員会が研修会開催や活動への助言、フォローを行いながら、活動の推進、レベルアップを図ってきました。「勤務がシフト制のためメンバーが集まりにくい」「異動等により活動が引き継がれにくい」など悩みは尽きないものの、年々経験を重ね、院内全体で取り組む活動として定着してきました。また、異業種が集まる外部研修や、「医療の改善活動全国大会」といったQC大会にも定期的に参加し、モチベーションを高めています。

6回目となる今回の発表会には、初めて道内の病院と自動車メーカーのQC担当者が聴講のため来院し、例年より緊張感漂う中での発表となりました。各サークルは、工夫を凝らしたスライドを活用しながら各部署の取り組みを熱心にアピールしていました。今年度ご指導いただいた宮内敏夫氏（QCサークル北海道支部）からは「サークルによって実力差がついているものの、年数を重ね事実を分析するレベルがアップしてきた。さらに技術を向上させ、院内のヒヤリハットの事例からの改善等にも取り組んではどうか」との講評をいただきました。発表終了後、QC活動委員会メンバーと宮内氏がQCストーリーに沿って発表内容を審査しました。

審査結果の発表

審査の結果、サークル名「セラハッピー」（リハビリ科）が最優秀賞に輝きました。患者様により質の高い医療を提供するために、作業療法でのスタッフの革細工のスキル向上を目指した取り組みが高く評価されました。また、第2位には、消耗品費を削減するため複合機のプリント枚数24％の削減に取り組んだ初挑戦の「ECOプラム隊」（事務部・総合企画室）、第3位には、早朝業務の短縮、業務の効率化に取り組んだ「なのはなデイズ」（高齢者デイケア）が選ばれました。「セラハッピー」は「第5360回QCサークル大会」（QCサークル北海道支部主催）の「医療・福祉」部門で優秀賞を受賞しました。

道内のQC大会で優秀賞に輝いた「セラハッピー」（リハビリ科）のメンバー

発表テーマと順位（入賞は6位まで）

発表順	発表テーマ	部署	順位
1	入浴の準備～自立への第一歩～	4病棟	
2	記載漏れなし～コスト意識アップ～	1病棟	
3	自立患者様の就寝薬後の口腔ケアの習慣化を目指す	3病棟	
4	起きよう!起こそう!やってみよう!! 離床率の向上と転ばぬ先の転倒予防体操"	6病棟	6
5	作業療法の参加数向上を目指して	7病棟	5
6	"なくそう！！！出棟時の記載漏れ！ ～どこいっちゃった～"	8病棟	
7	"ごわごわオムツ、さようなら～！ ー個々にあったより良い排泄ケアを目指してー"	2病棟	
8	患者様のオムツ交換の回数を減らそう！！	5病棟	4
9	Yes,We can!!　～学ぶ喜びをあなたに～☆革細工のスキルUP☆	リハビリ科	1
10	モーニング・チェンジ～朝の業務を減らそう～	高齢者DC	3
11	"ちょっと待った！！その印刷本当に必要！？ ～ 複合機プリント枚数２４％削減をめざして ～"	事務部	2

精神科救急病棟（スーパー救急）稼働

平成24年3月より精神科救急病棟（60床）が稼働しました。24時間365日、患者様を受け入れる病棟で、地域で精神疾患を抱えながら生活する方が増えている中、地域精神科医療に一層貢献できるよう積極的に取り組んでいきます。

精神科救急病棟は、スピーディーな救急の受け入れと質の高い治療・看護が条件とされ、認可においては、人員配置、設備、医療水準で高い基準を満たすことが条件とされます。当院は札幌都市圏では初の稼働となります。

精神科救急をめぐっては、全国的に夜間・休日の受診、入院、精神科救急情報センターへの電話相談件数が年々増加。また、長期入院患者の退院、地域移行促進が図られる中、救急医療の必要性が増しています。札幌市は新まちづくり計画において、精神科救急医療体制の強化を重点施策のひとつに掲げています。

当院では、精神疾患により幻覚、妄想、興奮など激しい症状のある方、自殺目的の多量服薬や自傷行為（リストカット等）などにより救急搬送され、急性期の集中的な治療を必要とする患者様を、夜間・休日に関わらず受け入れる体制を整えています。他にアルコール依存症、認知症など様々な症状に応じ、身体合併症を伴うケースでは、一般科との密な連携も必要とされます。

当院では、平成21年、精神科急性期治療病棟を開設し急性期医療への本格的な取り組みを開始。その後、札幌市の精神科救急医療体制に積極的に参画しながら救急体制を整備し、精神科救急病棟へと移行しました。（同病棟では、新たに入院した患者様のうち68％が3カ月以内に在宅へと退院されています。）

精神科救急病棟は、個室率50％以上で看護人員を手厚く配置。3カ月以内の退院を目指し、急性期に伴う症状に対して短期集中型の治療（薬物療法、精神療法）を行います。看護は固定チームナーシングによる受け持ち制の看護により、患者様の症状や状態をしっかりと把握し、入院中の合併症や事故防止に備え、安全を確保します。その他、作業療法、心理療法等のリハビリテーションを行い、多職種の連携によるチーム医療を実践しています。退院にあたっては、必要に応じデイケア、訪問看護、その他の在宅サービスなどフォロー体制を整えています。

学術研修レポート14

職場のメンタルヘルスについて

さっぽろ香雪病院　精神保健部長　橋本 真一先生

2月の学術研修会では、当院の橋本真一先生に職場のメンタルヘルスの観点から、新型うつ病への対応や職場で自殺者が出た時のケア等についてご講演いただきました。橋本先生は非常勤で産業医もされているので、企業における取り組みや事例も交えた、わかりやすく興味深いお話でした。

新型うつ病は、従来のうつ病と印象が異なるため、会社の中でも上司が対応に困惑することが多いようです。特徴は、若い人に多く、独特のこだわりがあり周囲からは自己中心的と見られやすい、自分の好きな活動はできるが仕事となると調子が悪くなる、疲労や不調を訴えて会社を休む、上手くいかないことを他者のせいと考えがち、不安障害を合併することが多い、とされています。一見、怠けているように見られたりするが、本人は深刻に悩んでおり、周囲はそれを受けとめて接し、本人との関係を保つことが大切です。本人とその家族、職場、産業医、医療機関などが連携して対応します。

また、社会的に深刻な自殺者の問題があります。もし職場で自殺者が出た場合、残された従業員は精神的に動揺することも多く、専門家の助力を得ながら適切なケアをすることが重要です。

今回の講演は、職場における心の健康への対応の重要性と、私たち医療従事者にできることを考えるよい機会となり、日々の治療につなげていきたいと思いました。

（臨床心理士 神山 恵子）